一枚岩だったから、子どもが変わったのではない

― 生徒の成長を、一緒に喜べる５人になるまで ―

神戸市立太山寺中学校 瀧口麻帆

◆ 生徒を見る目が変わった

２年前、私たち英語科の５人は、決して一枚岩ではありませんでした。仲が悪かったわけではありません。それぞれが自分の授業に一生懸命取り組んでいましたが、年度初めの教科部会以外に、５人で授業についてじっくり話し合う機会はほとんどありませんでした。

福岡市への授業視察をきっかけに、私たちは授業を見直し始めました。ただ、実際に変えるとなると、不安がありました。これまで使ってきた文法説明のスライドや練習プリントを減らし、基本文やQ&Aを土台に、生徒が自分で考え、伝え合う時間を増やす。本当にこれで力がつくのか。長年続けてきた授業から離れることには、ためらいもありました。

まず５人で話し合ったのは、単元の最後に、生徒が何を自分の力でできるようになっているかでした。誰に、何のために、どのような内容を伝えるのか。教師が細かく指示しなくても、生徒が自分で判断して取り組める姿を具体的に描き、そこから逆算して必要な練習や言語活動を組み立てていきました。

その中に位置づけたのが、思考の可視化と自己調整です。マンダラ・チャートやマッピングで考えを可視化し、友だちと伝え合った後に、何を加え、何を残すかを自分で決める。最初の考えと見直した後の考えを比べることで、生徒がどこで迷い、何を手がかりに考え直したのかも見えるようになりました。

すると、生徒たちの姿が変わり始めました。友だちの答えを聞いて、さらに質問を返す。うまく伝えられなかったことを悔しがり、もう一度挑戦したいと申し出る。知識を教え込み、正しく答えられたかを確かめることに多くの時間を使っていた頃には、見られなかった姿です。自分で考え、選んだことが相手に伝わる経験を重ねる中で、生徒たちは自信をつけていきました。

それまでも、子どもたちへの「愛」はあったつもりです。しかし、今どんな力がつき、何ができるようになったのかを見取る「eye」が、自分には足りなかったのだと気づきました。授業の進め方ばかりを気にしていた私が、生徒の表情や発言、その変化に目を向けるようになったのです。

◆ それぞれの教室から、変化の報告が届く

公開授業後、“ My Happiness ”について英作文を書く時間を設けました。参照してよいものは、考えを整理してきたマンダラ・チャートやマッピングです。多少の英単語のメモはありますが、英文原稿ではありません。

ところが、いざ書き始めると、生徒たちはほとんど資料を見ていませんでした。34人中23人が60語以上を書き、30語以下だった生徒は２人でした。前回の記録からも伸びが見られました。

自分にとっての幸せについて考え、友だちと伝え合い、また考える。その積み重ねが、書く場面にも表れたことが何よりうれしかったです。マンダラ・チャートやマッピングに整理した内容は、紙の上だけに残っていたのではありません。生徒たちは、それまで考え、話してきたことを、自分の力で英文にしてい

たのです。

こうした変化は、私の“ My Happiness ”の授業だけで起きていることではありません。他の先生方も、それぞれの教室で見られた生徒の姿を、うれしそうに伝えてくれます。以前は、教科部会で授業の進め方を確認することはあっても、一人の生徒が何をできるようになったかを話題にすることは、ほとんどありませんでした。今では、仲間の報告を聞いて一緒に喜び、どうすれば自分の授業でもそのような姿が生まれるかを話し合っています。

◆ 生徒の変化を、５人で喜び合う

研究授業を終えた日、職員室で花田先生が満面の笑みで声をかけてくれました。

「瀧口先生！ ○○さんが大活躍してくれたんです！ すごかったです！」

そのうれしそうな表情を、今でも忘れることができません。花田先生が真っ先に伝えてくれたのは、授業が予定どおり進んだことでも、自分の指導がうまくいったことでもありません。一人の生徒が見せた成長でした。私もうれしくなりました。

５人の経験も、得意なことも同じではありません。最初から考えがそろっていたわけでもありません。それでも、互いの授業に関心を持ち、生徒の姿を手がかりに話し合うようになると、うまくいかなかったことも相談できるようになりました。一人で抱え込んでいた授業の悩みを、５人で考えられるようになったのです。

一枚岩だったから、子どもが変わったのではありません。授業を一緒に考え、それぞれの教室で生徒の成長を確かめ、喜び合ううちに、私たち５人は一枚岩になっていました。

今では、一人の生徒の成長を５人で喜び、「では、次に何をするか」を一緒に考えられます。２年前にはなかった、私たちの教科部会の姿です。